

参 考 資 料

教 育 関 係 資 料

(教育行政の現状と課題)

平成15年8月

広島県教育委員会

是正指導

平成10年5月

文部省による是正指導

教育内容関係7項目

- 国旗掲揚・国歌斉唱 → 完全実施
- 人権学習内容適正化 → 改善
- 道徳の名称・内容 → 名称是正・全内容指導
- 国語の名称 → 適正化
- 国歌「君が代」指導 → 全小中学校で指導
- 授業時数・単位時間 → 改善
- 指導要録記入 → 適正に記入

学校管理運営関係6項目

- 教員の勤務(破り年休) → 適正化
- 主任の任命(時期・人選) → 改善
- 主任手当の拠出 → 拠出の減少
- 職員会議の運営 → 改善
- 校長権限を制約する確認書 → 是正
- 市町村立学校の運営管理 → 改善

現状と課題

平成13年6月

是正指導に一定の区切り
多くの学校で校長を中心とした体制

改善点

- 教育内容の充実や指導方法の改善
→ 習熟度別授業実施校数(小中) 3.4倍
(H12 145校→H15 499校)
- 教員研修の充実
→ 研究公開授業実施校数(小中) 4.2倍
(H12 169校→H15 711校)
- 学力向上・進学指導の充実
→ 国公立大学合格者 17%増
(H12 1,556人→H15 1,826人)
- 校長中心の学校運営体制
→ 生徒指導による暴力行為減少 37%減
(H12 1,996件→H14 1,263件)
- 開かれた学校運営の推進
→ 学校へ行こう週間参加者 60%増
(H12 25万人→H14 40万人)

課題

- 学校の実態に温度差
→ きめ細かな把握と支援
- 是正から改革への過渡期
→ 学校が自律する仕組みづくりの確立

今後の方向(15年度)

課題の残る学校へは是正指導を徹底
全体としては教育改革を推進

是正指導の徹底

- 課題校の実態把握
→ 県内全公立小中学校を対象として実施
- 課題校へ直接訪問指導
→ この夏季休業中に実施

教育改革の推進

- 基礎基本の徹底
(知育)・・・学力テストの実施・公開(全小中高等学校)
国語力の向上(ことばの教育)
(徳育)・・・道徳教育の推進(重点校倍増)
(体育)・・・体力テストの実施・公表(全小中学校)
- 学校経営体制の確立
(目標)・・・学校経営目標の設定(全公立校)
(評価)・・・学校評価の実施(全公立校)
新しい人事評価の実施(全公立校)
(体制)・・・主任制の強化
- 先導的な教育改革施策
・ 中高一貫教育校の開設
・ 進学重点校・拠点校の指定

知 育

平成14年度「基礎・基本」定着状況調査報告書の概要	1
県立高等学校の学力向上対策の成果について	8
小・中学校における習熟度別指導の実施状況	9
小・中学校における研究公開の実施状況	10

徳 育

平成14年度の広島県における生徒指導上の諸問題の現状について...	11
-----------------------------------	----

体 育

平成14年度生徒の体力・運動能力調査結果概要	18
------------------------------	----

平成 1 4 年 度
「基礎・基本」定着状況調査
報告書の概要

平成 1 4 年 1 1 月

広島県教育委員会

I 調査の概要

1 調査の趣旨

- (1) 学習指導要領に示されている目標及び内容に基づき、特に、「読み・書き・計算」などの基礎的な内容とともに、思考力・判断力・表現力などの定着状況を把握する。
- (2) 児童生徒の生活や学習に関する意識や実態及び各学校における教科指導等の実態を把握する。
- (3) 各学校が全県的な結果と比較・分析することを通して、自校の課題を明確にするとともに、指導内容や指導方法の改善・充実を図る。
- (4) 調査結果をもとに児童生徒の学習の到達度を明らかにし、県の教育行政施策に生かす。

2 調査対象

県内の全公立小学校第5学年及び全公立中学校第2学年の児童生徒

3 調査期日

平成14年6月25日（火）

4 調査内容

(1) 実施教科等

小学校第5学年 ①国語、算数における前学年までの学習内容の定着状況調査
②生活と学習に関する意識・実態についての児童質問紙調査
③前年度の指導方法等についての学校質問紙調査

中学校第2学年 ①国語、数学、英語における前学年までの学習内容の定着状況調査
②生活と学習に関する意識・実態についての生徒質問紙調査
③前年度の指導方法等についての学校質問紙調査

(2) 実施時間

各教科の定着状況調査及び生活と学習に関する意識・実態についての質問紙調査の実施時間は、小学校ではそれぞれ45分、中学校ではそれぞれ50分とする。

5 集計対象学校数，集計対象児童生徒数等

集計は調査を実施した学校のうち、指定の期日に実施した学校のみを対象とした。また、調査を途中から始めたり途中でやめたりした児童生徒あるいは、放送設備の故障や聴覚障害等により音声問題に取り組むことができなかった児童生徒を除いた数を、集計対象者数とした。

実技による調査（英語）は、希望校を対象とした調査であるため、それ以外の調査とは集計の対象者数が異なる。

ただし、指導方法等の学校を対象とした調査結果集計の際には、放送設備の故障等により音声問題に取り組むことができなかった学校や、昨年度から今年度にかけて学校の統廃合が行われ、昨年度児童生徒をどのような指導方法で指導していたか確認できない学校などを除いている。

学年	調査実施		集計対象	
	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数
小学校第5学年	611校	26,720名	608校	26,412名
中学校第2学年	252校	25,231名	252校	24,676名
実技による調査（英語）			191校	14,236名

6 語句の説明

語句	説明
正答	正しい答え
準正答	完全な誤りではなく、正答としての反応があるもの
誤答	完全に誤った答え
正答率	設問ごと又は領域や教科全体の正答であった児童生徒の割合
準正答率	設問ごとの準正答であった児童生徒の割合
誤答率	設問ごとの誤答であった児童生徒の割合
無解答率	設問ごと又は領域や教科全体の無解答であった児童生徒の割合
通過率	設問ごとの、正答または準正答を解答した児童生徒の割合
平均通過率	設問ごとの通過率を領域や教科全体等で平均したもの
通過設問数	児童生徒が各教科で通過した設問数
領域	学習指導要領に示されている各教科における指導内容の区分
観点	指導要録の指導に関する記録における観点別学習状況の評価の観点

Ⅱ 調査結果の概要

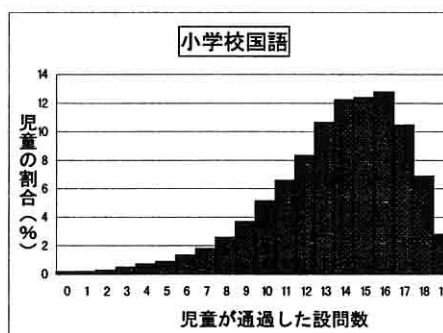
1 各教科の学習内容の定着状況についての調査結果の分析と考察

(1) 小学校国語

教科全体及び領域別平均通過率

領域等	教科全体	聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項
平均通過率(%)	71.6	71.7	77.7	64.0	75.6

- 通過率 60%以上の児童の割合は 76.4%であり、右のグラフで、全体の形がはっきりとした山の形で右寄りであることから、基礎的・基本的な内容は全体として定着していると考えられる。
- 手紙文を書くこと、漢字を書くこと及び読むことは概ね定着している。一方、長文を読んで内容を理解することは、定着が不十分である。
- 「聞くこと」については、今回、新たに放送による聴き取りを実施した。概ね、内容は聞き取れているものの、情報として大切なポイントを聞き取り適切に記述することは不十分である。普段からメモを取ることに慣れさせ、話を正確に聞き取らせる指導が必要である。
- 「書くこと」については、手紙文を書くなどの言語活動を生かして、必要な要件を簡潔に書く指導を他教科等においても日常的にさせる必要がある。
- 「読むこと」については、段落を選択する設問の通過率は 36.5%である。また、情景を想像しながら登場人物の心情を把握する設問の通過率は 40.5%である。場面の移り変わりや情景を想像して内容を読み取ったり、段落相互の関係を考えさせたりして、長文を読み取る力を定着させる指導が必要である。
- 「言語事項」において、今回新たに出题したローマ字については、読むことに比べ、書くことの通過率が低く、繰り返し指導を行う必要がある。

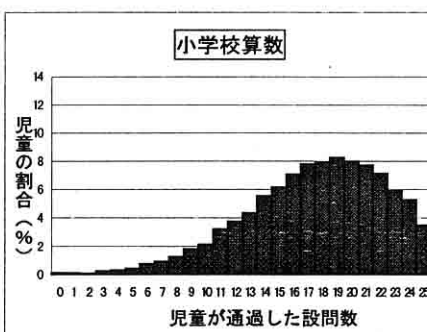


(2) 小学校算数

教科全体及び領域別平均通過率

	教科全体	数と計算	量と測定	図形	数量関係
平均通過率(%)	69.9	74.4	72.1	58.9	66.9

- 通過率 60%以上の児童の割合は 74.9%であり、右のグラフで、全体の形がはっきりとした山の形で右寄りであることから、基礎的・基本的な内容は全体として定着していると考えられる。
- 計算したり作図したりすることや、数の位や面積の単位を理解することは定着している。一方、十や百を単位として数の大きさをとらえ計算の仕方を考えるなどの数学的な考え方や、分数の意味を理解することは、定着が不十分である。
- 「数と計算」については、数学的な考え方の平均通過率は 44.2%であり、学校別通過率のばらつきも大きい。既習の計算をもとに新しい計算の仕方を考えさせる指導が必要である。また、分数の意味の理解をみる設問の通過率は 33.9%であり、学校別通過率のばらつきも大きい。単位分数に着目させ理解させる指導が必要である。
- 「量と測定」については、面積、角の大きさ、重さについての感覚を育てる指導が必要である。
- 「図形」については、数学的な考え方の平均通過率は 46.2%であり、学校別通過率のばらつきも大きい。図を描いたり、紙を切って広げたりする算数的活動を取り入れた指導が必要である。
- 「数量関係」については、数学的な考え方の平均通過率は 54.3%である。伴って変わる2つの数量の関係を調べる設問の通過率は 51.6%であり、学校別通過率のばらつきも大きい。順序よく表に整理して、共通のきまりを見つけさせる指導が必要である。

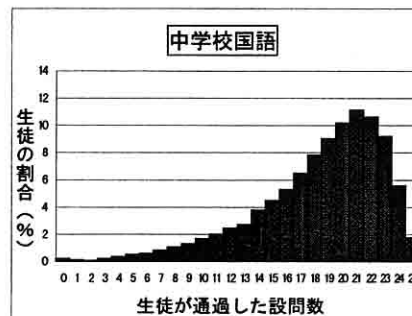


(3) 中学校国語

教科全体及び領域別平均通過率

領域等	教科全体	聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項
平均通過率(%)	73.3	79.2	75.5	62.4	75.5

- 通過率 60%以上の生徒の割合は 81.9%であり、右のグラフで、全体の形がはっきりとした山の形で右寄りであることから、基礎的・基本的な内容は全体として定着していると考えられる。
- 話を聞いて事実と意見を聞き分けること、漢字を書くこと及び読むことは概ね定着している。一方、長文を読み文章の構成や展開をとらえ、内容を理解することは、定着が不十分である。
- 「聞くこと」については、話題の趣旨の聞き取る設問の通過率は 66.0%である。話を的確に聞き取るためには、要点を押さえたメモを活用し、話し手の意図は何かを考えながら聞き取らせる指導をする必要がある。
- 「書くこと」については、4問中3問は学校別通過率のばらつきが大きい。短作文などを書かせ、書くことに慣れさせるとともに、論理的に書く能力を付ける指導が必要である。また、文字や語句の用法、叙述の仕方等を推敲する指導も必要である。
- 「読むこと」については、いろいろな長文を活用し、文章の構成を考えながら、内容を適切に読み取る力を定着させる指導が必要である。
- 「言語事項」については、言語事項の設問 13 問中4問は学校別通過率のばらつきが大きい。繰り返し指導や継続的な指導が必要である。また、書写指導との関連を図り、字体、字画、筆順等に注意して、楷書で正しく整った文字が書けるよう、繰り返し指導をすることが大切である。

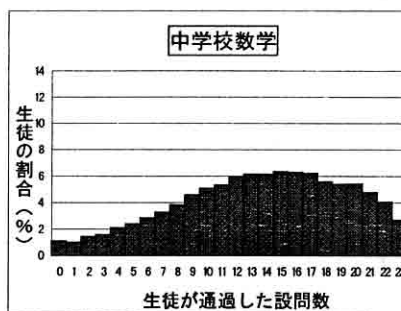


(4) 中学校数学

教科全体及び領域別平均通過率

	教科全体	数と式	図形	数量関係
平均通過率(%)	59.0	72.2	44.6	44.6

- 通過率 60%以上の生徒の割合は 53.1%であり、右のグラフで、全体の形が山の形でなく左右に広がっていることから、基礎的・基本的な内容の定着状況にばらつきがあり、生徒の実状に応じた指導方法の工夫改善が必要であると考えられる。
- 計算したり作図したりすることは概ね定着している。一方、2つの数量の関係を考えるなどの数学的な考え方、おうぎ形の弧の長さなどを求めること、空間図形の基本的な性質などを理解することは、定着が不十分である。
- 「数と式」については、数学的な考え方の観点の平均通過率は 35.8%であり、無解答率も 34.5%である。図や表に順序よく整理して規則性を見つけさせる指導が必要である。
- 「図形」については、おうぎ形の弧の長さを求める設問の通過率は、26.5%であり、無解答率も 30.1%である。また、空間における直線や平面の位置関係の理解をみる設問の通過率は、それぞれ 35.9%、44.6%であり、学校別通過率のばらつきも大きい。実際に展開図をかく、組み立てる、観察するなどの活動を通して理解を深めさせる指導が必要である。
- 「数量関係」については、比例や反比例の関係をみる設問の通過率は、それぞれ 43.8%、44.7%である。小学校での学習を発展させながら理解させる指導が必要である。



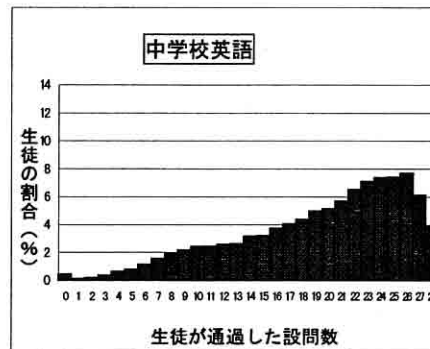
(5) 中学校英語

教科全体及び領域別平均通過率

領域等	教科全体	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと	話すこと(実技)
平均通過率(%)	69.3	83.0	47.2	73.1	62.7	79.0

※ 話すこと(実技)については、教科全体の通過率には含めていない。

- 通過率 60%以上の生徒の割合は 70.4%であり、右のグラフで、全体の形がはっきりとした山の形で右寄りであることから、基礎的・基本的な内容は全体としては定着していると考えられる。
- 英語を聞くことや読むことは定着している。また、今回はじめて実施した話すことについての実技調査によると、英語でのあいさつや簡単な応答は定着している。一方、文の意味を考えて話すこと、基本的な語の幅広い用法を理解すること及び場面に適した文を正しく書くことについては、定着が不十分である。
- 「聞くこと」については、語や文を正確に聞き取らせる指導とともに、話し手の意図など、伝えたい内容の中心となる部分をつかませる指導を行う必要がある。また、日頃からクラスルーム・イングリッシュなどで、英語に触れる機会を増やすことが大切である。
- 「話すこと」については、正しく相手に伝えるために、文の意味を考えて話すよう、強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声について指導する必要がある。
- 実技調査については、あいさつと提示した絵の内容に関して Yes, …, No, … で答える問いの通過率はいずれも 80%を超えているが、時刻やものの数を正確に答える問いの通過率は低かった。また、自分のことを伝える問いについては、一語や一文で答えた生徒の割合が高かった。コミュニケーションを深めるために、一文付け加えるなどして、より詳しく伝えるよう指導することが必要である。
- 「読むこと」については、日頃から英語の簡単な物語を読ませるなど、まとまった内容の英語を読む機会を増やすとともに、設問の仕方に工夫するなど、文章のあらすじや大切な部分を読み取らせるための指導の工夫が必要である。
- 「書くこと」については、身の回りの出来事や、自分で考えたり感じたりしたことなどを自由に書かせる活動や、教科書を暗唱して書かせるなどの定着を図る活動を、家庭学習も含めて、バランスよく行うことが大切である。また、this などの運用度の高い基本的な語については、いくつかの例文を示し、幅広い用法を理解させることも必要である。



2 指導方法等についての調査結果の分析

○ 継続的な指導（あてはまると回答した学校の割合 単位 %）

	学年一斉の ドリル学習	計算問題	漢字の書き取り	補充的な学習
小学校第5学年	69.4	98.4	98.8	85.9
中学校第2学年	52.0	77.0	87.6	79.0

○ 指導方法（あてはまると回答した学校の割合 単位 %）

	国語の宿題	算数・数学 の宿題	英語の宿題	国語科でのコン ピュータ活用	算数・数学科での コンピュータ活用
小学校第5学年	99.7	99.7	—	46.0	24.6
中学校第2学年	95.3	96.8	98.4	11.5	13.9

3 生活と学習に関する意識・実態についての調査結果の分析

○ 生活について

	平日のテレビ等 視聴時間（時間）	1週間の読書時間 （時間）	1ヶ月の読書冊数 （冊）	1週間の習い事 の回数（回）
小学校第5学年	2.57	1.22	3.77	1.83
中学校第2学年	2.91	0.90	1.77	0.72

○ 学習について

	平日の学習時間 （分）	休日の学習時間 （分）	1週間の勉強日数 （日）	1週間の通塾日数 （日）
小学校第5学年	53.2	52.8	4.09	0.95
中学校第2学年	54.2	55.4	2.88	1.26

○ 休日の過ごし方（複数回答あり 単位 %）

	家族と一緒に	友達と遊ぶ	のんびりする	一人で遊ぶ	部活動に参加
小学校第5学年	59.5	57.3	26.2	29.5	—
中学校第2学年	41.2	68.6	44.5	30.6	45.1

4 各教科の学習内容の定着に影響を与える項目についての分析と考察

学校を対象とした指導方法等と児童生徒を対象とした生活・学習に関する調査についての調査をもとに、相関関係の分析や重回帰分析によって学力の定着要因を探った。

(1) 指導方法等について

指導方法等についての調査の各設問への回答と、その指導を受けた児童生徒の各教科の通過率との間には、相関係数からみても、重回帰分析の結果からみても、有意な関係はみられなかった。

(2) 生活と学習に関する意識・実態について

生活と学習に関する意識・実態についての調査の各設問への回答と、児童生徒の各教科の通過率との間には、相関係数や重回帰分析の結果から、小・中学校それぞれすべての教科において、次の項目について有意な関係がみられた。

① 生活に関することについて

小・中学校のすべての教科について、高い通過率と関連があると考えられるのは、次の2項目である。

- 自分の役割を最後までやりとげること
- 毎朝朝食を食べること

さらに、小学校のすべての教科について、高い通過率と関連があると考えられるのは、次の3項目である。

- 家の人とよく話をすること
- 1週間あたりの読書時間が長いこと
- 1週間あたりの習い事の回数が多いこと

なお、小・中学校のすべての教科について、低い通過率と関連があると考えられるのは、次の項目である。

- 家の人が、勉強しなさいとよく言うこと

② 学習に関することについて

小・中学校のすべての教科について、高い通過率と関連があると考えられるのは、次の5項目である。

- 各教科に対して「授業がよくわかる」と思うこと
- 宿題は必ずやること
- 答えが間違っていたとき、その理由を確かめること
- 自分からいろいろな問題を解いてみること
- 1週間あたりの自宅学習日数が多いこと

さらに、小学校のすべての教科について、高い通過率と関連があると考えられるのは、次の3項目である。

- 各教科に対して「勉強が好きだ」と思うこと
- 授業中、進んで発表したり、質問したりすること
- 平日の自宅での勉強時間が長いこと

また、中学校のすべての教科について、高い通過率と関連があると考えられるのは、次の5項目である。

- よくわかるように、勉強の仕方を工夫すること
- 授業中、先生の説明をよく聞くこと
- 授業中、ノートをとること
- わからない問題でもあきらめないうでやってみること
- 休日の自宅での勉強時間が長いこと

県立高等学校の学力向上対策の成果について

平成15年6月19日
指導第二課



県立高校発案の学力向上計画等を基に、学力向上の推進力となる高校に対して重点的な支援を行い、その取組みの成果を県立高校全体に還元する。(H12～H14)

【学力向上対策に係る具体的な方策例】



- ★評価に係る研修
- ★新しい大学入試問題への対応
- ☆教科指導等に係る県外先進校視察
- ☆公開研究授業の実施



- ★シラバスの作成、充実
- ★成果発表会の開催
- ☆進路診断会議の開催
- ☆習熟の程度に応じた指導



- ☆大学教官の出張講義
- ☆学習合宿の実施
- ☆家庭学習の定着
- ☆朝の読書の実施

(★印は重点校共通の取組み、☆印は各学校独自の取組み)

【学力向上対策の成果】

○平成15年度大学入試センター試験の結果

★受験者数

- ・重点校等(H13) 2,775人 → (H14) 3,247人 → (H15) 3,426人
- ・県立高校全体(H13) 3,140人 → (H14) 3,588人 → (H15) 3,775人

★全国平均点以上の得点者数(5教科6科目型)

- ・重点校等(H13) 831人 → (H14) 939人 → (H15) 1,121人
- ・県立高校全体(H13) 841人 → (H14) 964人 → (H15) 1,161人

○平成15年度国公立大学合格状況

★国公立大学合格者数

- ・重点校等(H13) 1,381人 → (H14) 1,454人 → (H15) 1,658人
- ・県立高校全体(H13) 1,565人 → (H14) 1,642人 → (H15) 1,826人

★東大、京大をはじめとする難関国立大学への現役合格者数

- ・重点校等(H13) 61人 → (H14) 57人 → (H15) 48人
- ・県立高校全体(H13) 61人 → (H14) 58人 → (H15) 50人

★広島大学への現役合格者数

- ・重点校等(H13) 176人 → (H14) 162人 → (H15) 234人
- ・県立高校全体(H13) 197人 → (H14) 183人 → (H15) 247人

○研究授業の実施状況

★実施校数、実施回数 ※普通教科のみの数

- ・重点校(H12) 14校38回 → (H13) 21校108回 → (H14) 22校138回
- ・県立高校全体(H12) 22校53回 → (H13) 37校157回 → (H14) 67校262回

○シラバスの作成状況

★すべての県立高校で作成・活用している。

○各種コンクールへの参加状況

★科学実験コンクール

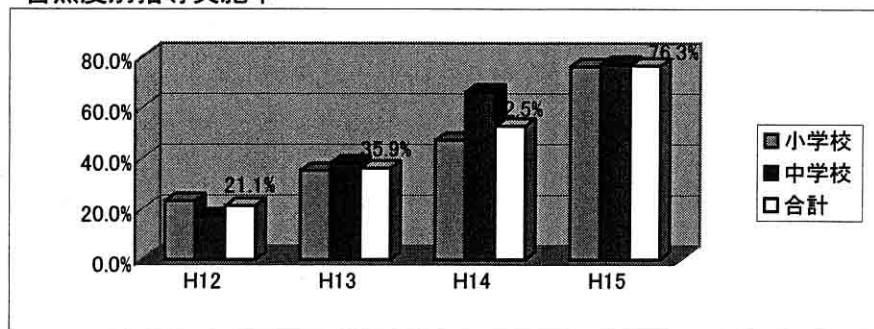
- ・県立高校全体(H12) 74人 → (H13) 129人 → (H14) 257人

★数学コンクール

- ・県立高校全体(H12) 31人 → (H13) 49人 → (H14) 81人

小・中学校における習熟度別指導の実施状況（広島市を除く）

1 習熟度別指導実施率



2 内 訳

		H12	H13	H14	H15
小学校	学校数	493	485	476	463
	実施校数	112	171	224	352
	割合	22.7%	35.3%	47.1%	76.0%
中学校	学校数	194	192	192	191
	実施校数	33	72	127	147
	割合	17.0%	37.5%	66.1%	77.0%
合計	学校数	687	677	668	654
	実施校数	145	243	351	499
	割合	21.1%	35.9%	52.5%	76.3%

※ 平成15年度は、平成15年度中に実施予定を含む。

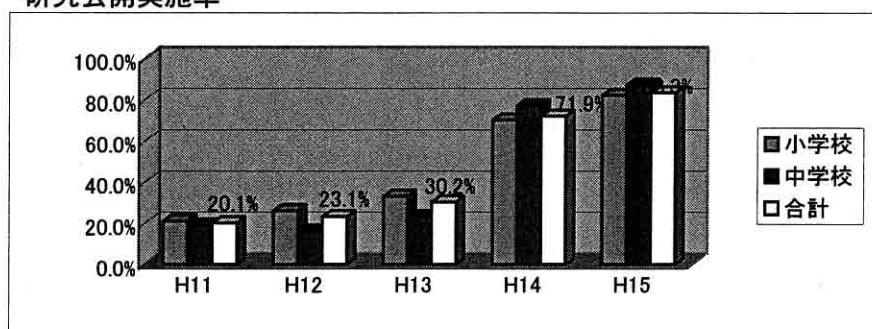
習熟度別指導

児童・生徒の学習内容の習熟の程度に応じ、学級内や、学級の枠を越えてグループを編成し、きめ細かな指導を行うこと。

ここ数年で実施校数が小・中ともに急速に増加しており、児童生徒の基礎学力の向上に寄与している。

小・中学校における研究公開の実施状況

1 研究公開実施率



2 内訳

		H11	H12	H13	H14	H15
小学校	学校数	632	628	621	612	600
	公開校数	131	164	206	427	496
	割合	20.7%	26.1%	33.2%	69.8%	82.7%
中学校	学校数	254	254	252	252	252
	公開校数	47	40	58	194	219
	割合	18.5%	15.7%	23.0%	77.0%	86.9%
合計	学校数	886	882	873	864	852
	公開校数	178	204	264	621	715
	割合	20.1%	23.1%	30.2%	71.9%	83.9%

※ 平成15年度は、平成15年度中に実施予定を含む。

研究公開

学校内で行った教育内容等に関する先進的又は特色ある研究実践を、他校の関係者や保護者、地域住民に公開することにより、外部評価を取り入れながら、成果を授業改善に生かすことを目的とするもの。

ここ数年で実施校数が急増し、教職員の授業改善への意欲が向上していることが伺える。

平成14年度の広島県における生徒指導上の諸問題の現状（速報）について

〔平成15年7月11日〕
教 育 委 員 会

概要	1
(1) 公立小・中・高等学校（全日制・定時制）における暴力行為発生件数の年次推移	2
(2) 公立小・中・高等学校（全日制・定時制）における暴力行為発生学校数等の年次推移	3
(3) 公立小・中・高等学校（全日制・定時制）におけるいじめ発生件数等の年次推移	4
(4) 国・公・私立の小・中学校における不登校児童生徒数等の年次推移	5
(5) 公・私立高等学校（全日制・定時制）における中途退学者数等の年次推移	6

1 暴力行為【公立小学校、中学校、高等学校（全日制・定時制）】

（1）状況（学校内及び学校外をあわせた数）

発生件数 小学校87件、中学校966件、高等学校210件

暴力行為の発生学校数 小学校41校、中学校177校、高等学校81校

（2）前年度比（学校内及び学校外をあわせた数）

発生件数では、小学校は20件減少、中学校は346件減少、高等学校は54件減少。

(18.7%減) (26.4%減) (20.5%減)

発生学校数では、小学校は10校増加、中学校は13校減少、高等学校は18校減少。

（3）全国比較

全国数値は未発表。

2 いじめ【公立小学校、中学校、高等学校（全日制・定時制）】

（1）状況

発生件数 小学校113件、中学校346件、高等学校60件

1校当たりの発生件数 小学校0.2件、中学校1.4件、高等学校0.6件

（2）前年度比

発生件数では、小学校は5件減少、中学校は143件減少、高等学校は2件減少。

(4.2%減) (29.2%減) (3.2%減)

1校当たりの発生件数では、小学校は前年同、中学校は0.5件減少、高等学校は前年同。

（3）全国比較

全国数値は未発表。

3 不登校【国・公・私立の小学校、中学校】

（1）状況

不登校児童生徒数 小学校 821人、中学校 2,982人

不登校児童生徒の割合 小学校 0.49%、中学校 3.35%

（2）前年度比

小学校では20人増加、中学校では6人減少。

(2.5%増) (0.2%減)

小学校では0.02ポイント増加、中学校では0.10ポイント増加。

（3）全国比較

全国数値は未発表。

4 中途退学【公・私立高等学校（全日制・定時制）】

（1）状況

中途退学者数 2,239人

中途退学率 2.5%

（2）前年度比

中途退学者数では、419人減少。

(15.8%減)

中途退学率では、0.4ポイント減少。

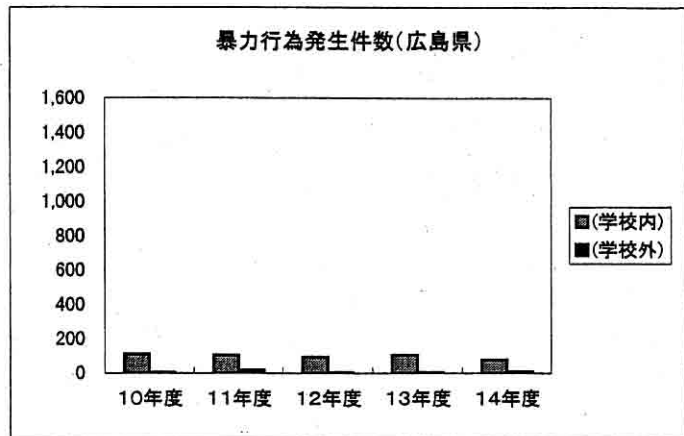
（3）全国比較

全国数値は未発表。

公立小・中・高等学校（全日制・定時制）における暴力行為発生件数の年次推移（H10～H14）

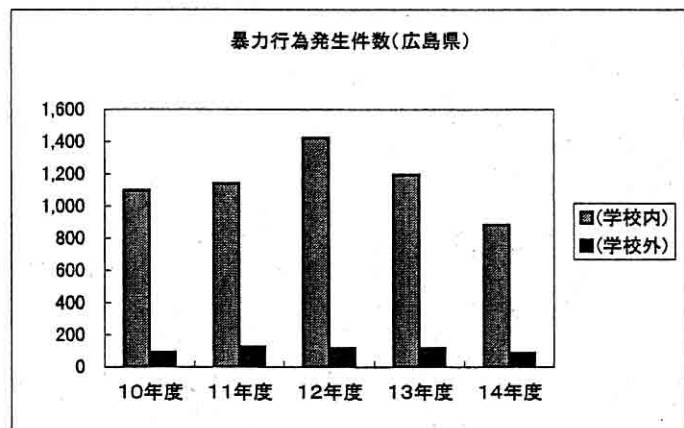
小学校

区分	発生件数 (学校内)	発生件数 (学校外)	計
10年度	111	4	115
11年度	104	19	123
12年度	94	4	98
13年度	104	3	107
14年度	77	10	87



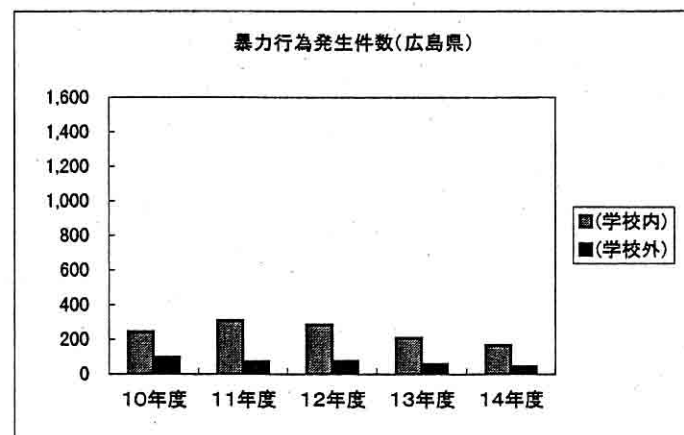
中学校

区分	発生件数 (学校内)	発生件数 (学校外)	計
10年度	1,099	90	1,189
11年度	1,139	124	1,263
12年度	1,424	117	1,541
13年度	1,196	116	1,312
14年度	882	84	966



高等学校

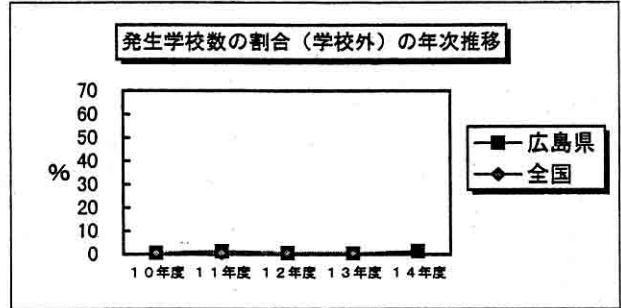
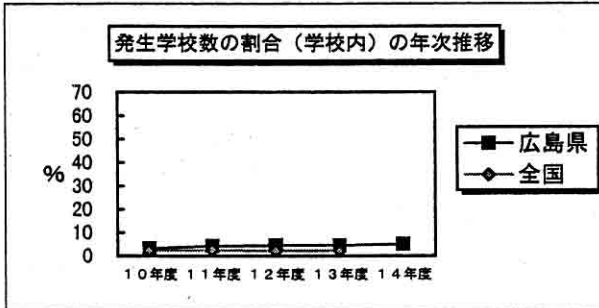
区分	発生件数 (学校内)	発生件数 (学校外)	計
10年度	243	96	339
11年度	308	71	379
12年度	283	74	357
13年度	207	57	264
14年度	167	43	210



公立小・中・高等学校（全日制・定時制）における暴力行為発生学校数等の年次推移（H10～H14）

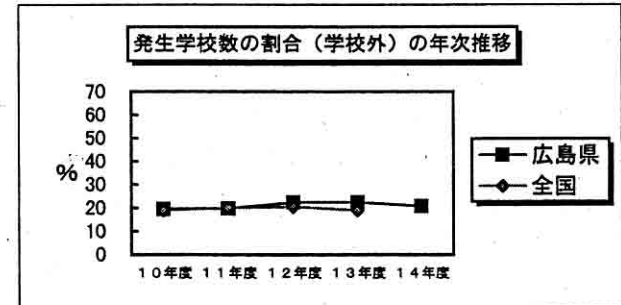
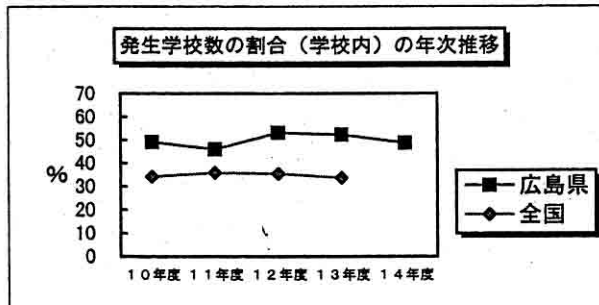
小学校

区分	学校内				学校外			
	広島県		全国		広島県		全国	
	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）
10年度	22	3.4	557	2.3	4	0.6	117	0.5
11年度	28	4.3	565	2.4	8	1.2	108	0.5
12年度	29	4.5	523	2.2	4	0.6	115	0.5
13年度	29	4.5	532	2.2	2	0.3	115	0.5
14年度	32	5.0	未発表		9	1.4	未発表	



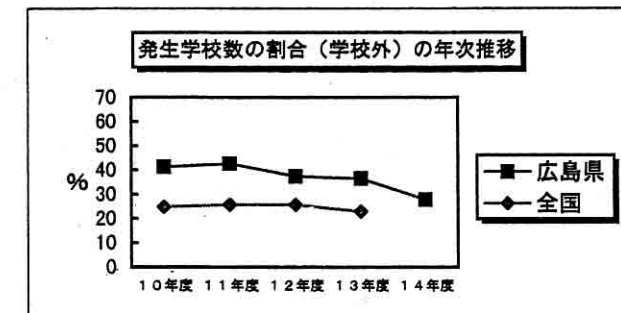
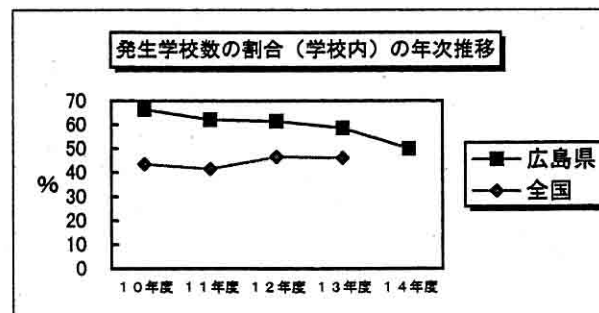
中学校

区分	学校内				学校外			
	広島県		全国		広島県		全国	
	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）
10年度	126	49.2	3,599	34.3	50	19.5	2,001	19.1
11年度	118	46.1	3,761	35.9	51	19.9	2,104	20.1
12年度	135	53.1	3,715	35.5	57	22.4	2,145	20.5
13年度	133	52.4	3,516	33.7	57	22.4	1,978	19.0
14年度	124	48.8	未発表		53	20.9	未発表	



高等学校

区分	学校内				学校外			
	広島県		全国		広島県		全国	
	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）	発生学校数	発生学校数の割合（％）
10年度	69	66.3	1,809	43.5	43	41.3	1,032	24.8
11年度	64	62.1	1,730	41.7	44	42.7	1,071	25.8
12年度	64	61.5	1,935	46.7	39	37.5	1,068	25.8
13年度	61	58.7	1,914	46.2	38	36.5	954	23.0
14年度	52	50.0	未発表		29	27.9	未発表	

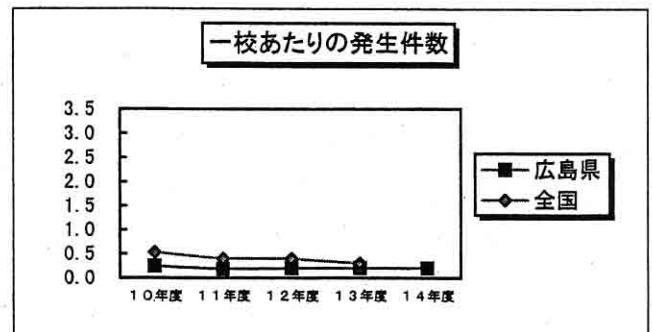
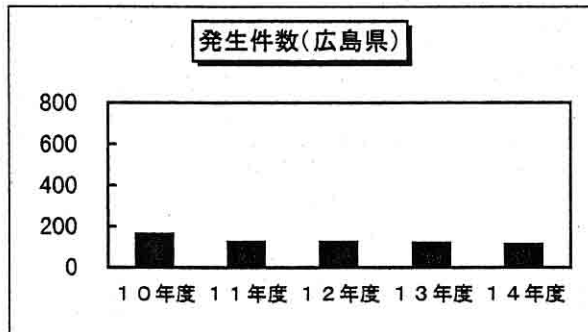


※暴力行為発生学校数の割合：（発生学校数）／（公立学校総数）×100

公立小・中・高等学校(全日制・定時制)におけるいじめ発生件数等の年次推移(H10～H14)

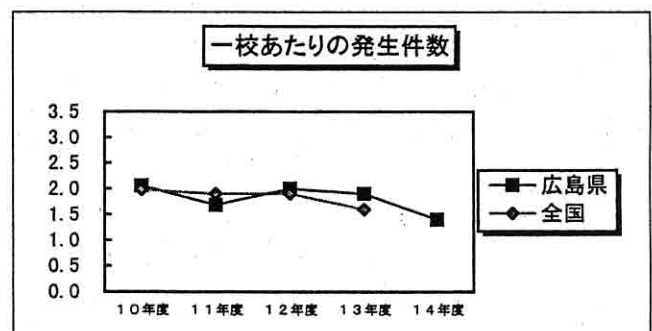
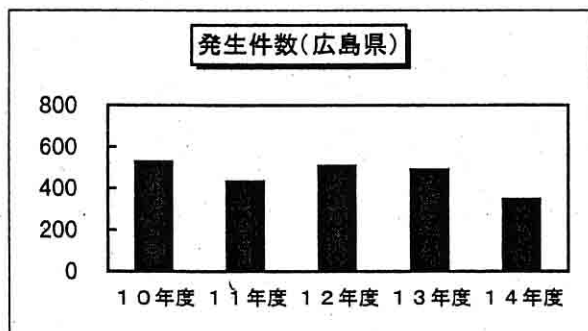
<小学校>

区分	発生件数	一校あたりの発生件数	
	広島県	広島県	全国
10年度	162	0.2	0.5
11年度	123	0.2	0.4
12年度	123	0.2	0.4
13年度	118	0.2	0.3
14年度	113	0.2	未発表



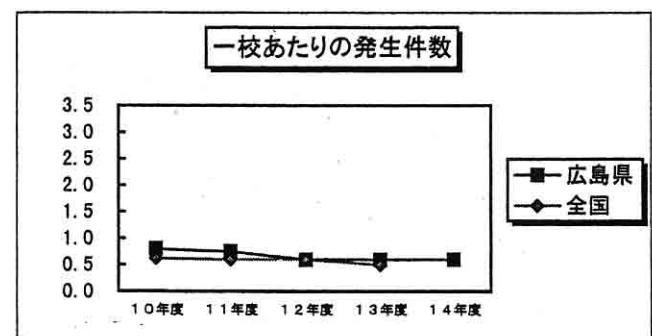
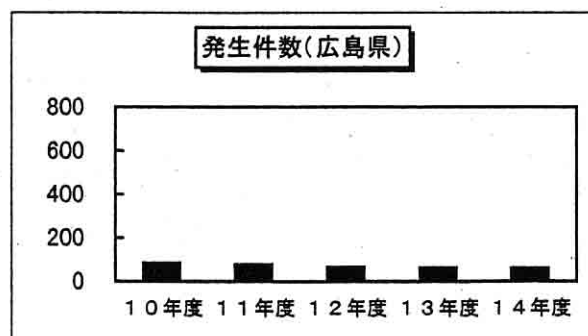
<中学校>

区分	発生件数	一校あたりの発生件数	
	広島県	広島県	全国
10年度	527	2.1	2.0
11年度	432	1.7	1.9
12年度	508	2.0	1.9
13年度	489	1.9	1.6
14年度	346	1.4	未発表



<高等学校>

区分	発生件数	一校あたりの発生件数	
	広島県	広島県	全国
10年度	85	0.8	0.6
11年度	77	0.7	0.6
12年度	66	0.6	0.6
13年度	62	0.6	0.5
14年度	60	0.6	未発表



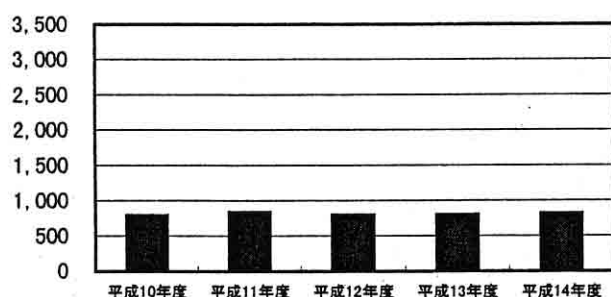
※一校あたりの発生件数：(発生件数) / (公立学校総数)

国・公・私立の小・中学校における不登校児童生徒数等の年次推移(H10～H14)

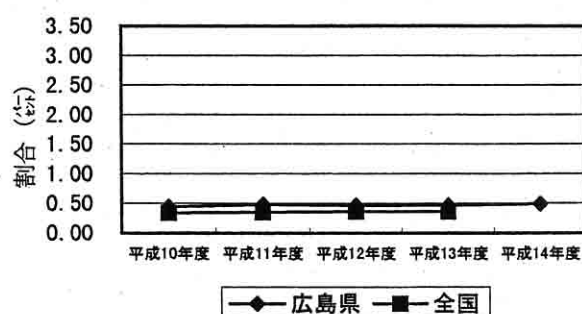
〈小学校〉

年次	不登校児童数				不登校児童の割合(%)		
	広島県				広島県		全国
		国立	公立	私立		公立	
平成10年度	793	3	790	0	0.44	0.45	0.34
平成11年度	838	1	837	0	0.48	0.49	0.35
平成12年度	797	2	795	0	0.46	0.47	0.36
平成13年度	801	0	801	0	0.47	0.48	0.36
平成14年度	821	0	821	0	0.49	0.50	未発表

不登校児童数（広島県）



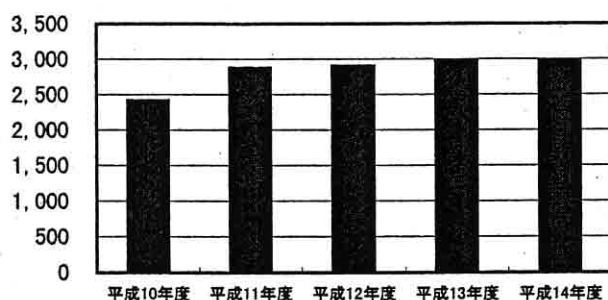
不登校児童の割合



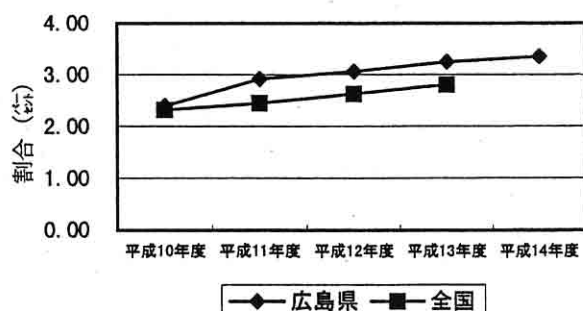
〈中学校〉

年次	不登校生徒数				不登校生徒の割合(%)		
	広島県				広島県		全国
		国立	公立	私立		公立	
平成10年度	2,417	1	2,383	33	2.39	2.59	2.32
平成11年度	2,879	2	2,844	33	2.92	3.18	2.45
平成12年度	2,905	6	2,839	60	3.06	3.32	2.63
平成13年度	2,988	6	2,926	56	3.25	3.55	2.81
平成14年度	2,982	4	2,902	76	3.35	3.66	未発表

不登校生徒数（広島県）



不登校生徒の割合

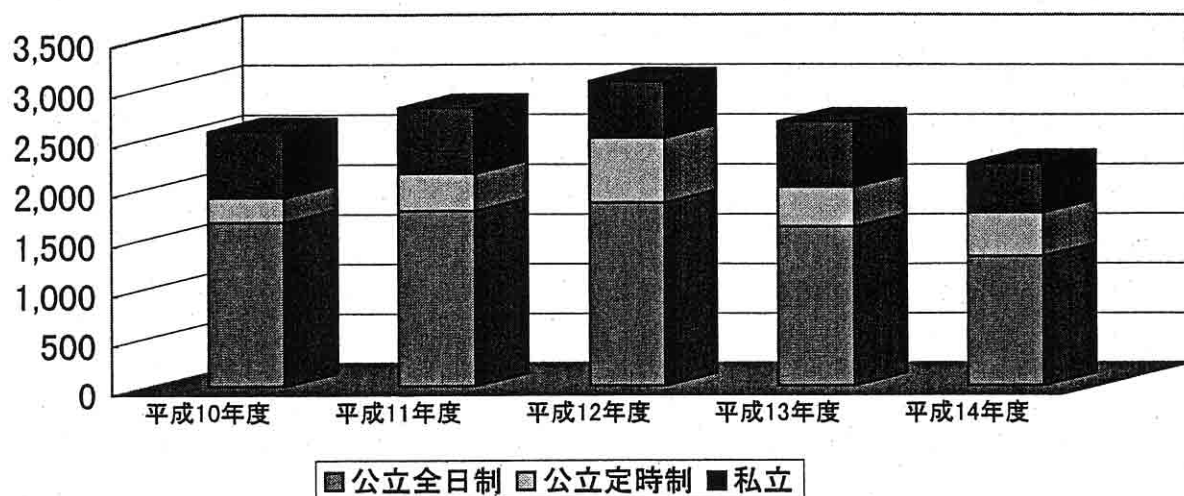


※不登校児童生徒数は、「不登校」を理由として30日以上欠席した者の数である。

※不登校児童生徒の割合：(国公立不登校児童生徒数) / (国公立学校児童生徒総数) × 100

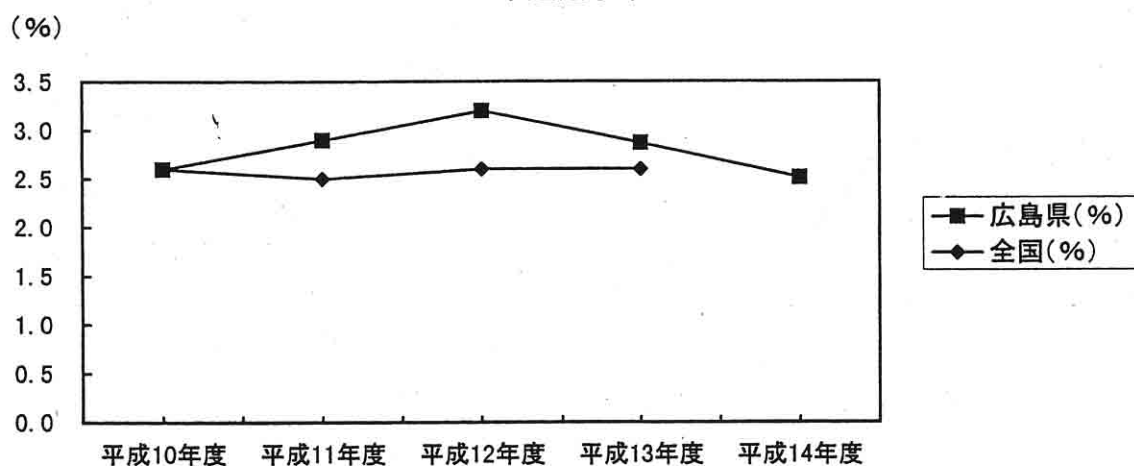
公・私立高等学校(全日制・定時制)における中途退学者数等の年次推移(H10～H14)

公私立高等学校(全・定)中途退学者数の年次推移



年度	公立		私立	計
	全日制	定時制		
平成10年度	1,898	247	666	2,564
平成11年度	2,138	375	661	2,799
平成12年度	2,496	652	566	3,062
平成13年度	2,001	397	657	2,658
平成14年度	1,742	438	497	2,239

中途退学率



年度	広島県 (%)	全国 (%)
平成10年度	2.6	2.6
平成11年度	2.9	2.5
平成12年度	3.2	2.6
平成13年度	2.9	2.6
平成14年度	2.5	未発表

※ 中途退学率：(公私中途退学者数) / (公私生徒総数) × 100

平成 14 年度 生徒の体力・運動能力調査結果概要

広島県教育委員会

(1) 調査の概要

① 調査の目的

近年の児童生徒の体力・運動能力の低下傾向に対し、活力ある生活を営む基礎的な体力・運動能力を培い、生涯を通じて運動に親しむ態度を育てる。

② 調査実施期間

平成14年4月～7月

③ 調査集計・分析

平成14年10月～12月

④ 調査年齢

6歳～17歳

⑤ 調査人員

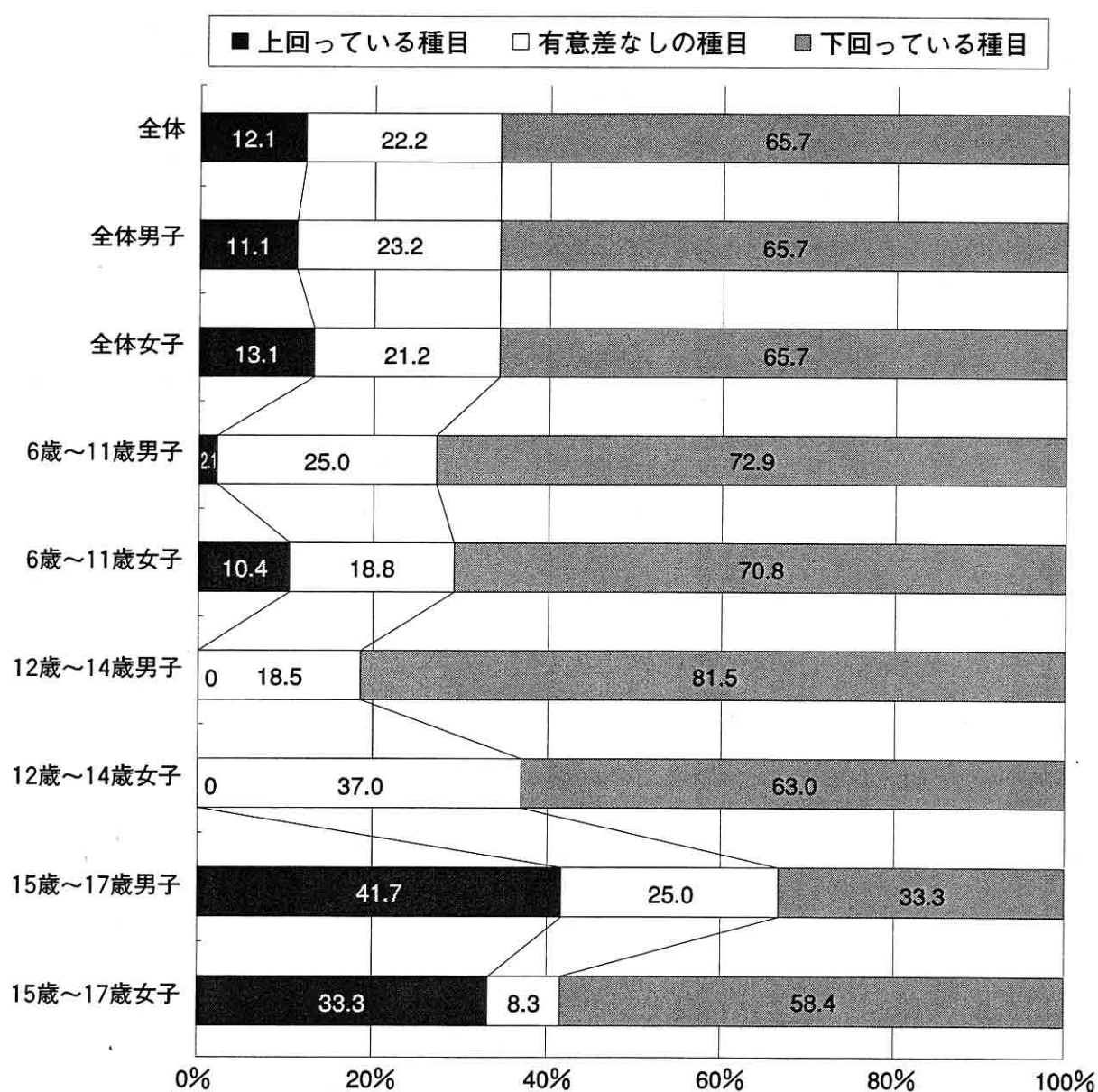
調 査 年 齢	調 査 人 員
6歳～11歳	13,835人
12歳～17歳	19,777人
合 計	33,612人

⑥ 調査内容（文部科学省新体力テスト）

年 齢	種 目
6歳～11歳	握 力, 上体起こし, 長座体前屈, 反復横とび 20mシャトルラン（往復持久走） 50m走, 立ち幅とび, ソフトボール投げ
12歳～17歳	握 力, 上体起こし, 長座体前屈, 反復横とび 20mシャトルラン（往復持久走）・ 持久走〔選択〕 50m走, 立ち幅とび, ハンドボール投げ

(2) 全国平均値(平成13年度)と広島県平均値(平成14年度)との比較〔表1〕

次のグラフは、平成13年度全国と平成14年度広島県の児童生徒の体力・運動能力の調査の結果で全国平均との有意差検定を行い、上回っている種目、有意差が認められない種目、下回っている種目を年齢男女別に表したものである。その結果、全種目中で全国平均値を「上回っている種目」は12.1%、「変わらない種目」は22.2%、「下回っている種目」は65.7%となっている。



〔表2〕

次の表は、有意差検定の結果を種目年齢男女別にまとめたものである。

性別		種目 年齢	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	持久走	50m走	立ち幅とび	ボール投げ
男子	6	▲	▲	○	▲	○	—	▲	▲	▲	
	7	▲	○	◎	▲	▲	—	○	▲	▲	
	8	▲	▲	○	▲	▲	—	▲	▲	▲	
	9	▲	○	○	○	▲	—	○	▲	○	
	10	○	▲	▲	▲	▲	—	▲	▲	▲	
	11	▲	▲	▲	▲	▲	—	○	▲	▲	
	12	▲	▲	○	▲	▲	▲	▲	▲	▲	
	13	▲	▲	○	▲	▲	▲	▲	▲	▲	
	14	▲	○	○	▲	▲	○	▲	▲	▲	
	15	▲	◎	▲	◎	—	◎	▲	▲	▲	
	16	○	◎	○	◎	—	◎	○	▲	▲	
	17	○	◎	◎	◎	—	◎	○	○	▲	
女子	6	○	▲	◎	○	○	—	▲	○	▲	
	7	◎	○	◎	◎	▲	—	○	◎	○	
	8	▲	▲	▲	▲	▲	—	▲	▲	▲	
	9	▲	▲	▲	▲	▲	—	▲	▲	▲	
	10	○	▲	▲	▲	▲	—	▲	▲	▲	
	11	▲	▲	○	▲	▲	—	▲	▲	▲	
	12	▲	▲	○	▲	▲	○	○	▲	○	
	13	▲	▲	○	▲	▲	▲	○	○	▲	
	14	▲	▲	○	○	▲	▲	▲	○	▲	
	15	▲	◎	▲	▲	—	◎	▲	▲	▲	
	16	▲	◎	○	◎	—	◎	▲	▲	▲	
	17	▲	◎	◎	◎	—	○	▲	▲	▲	
上回っている種目		1	6	5	6	0	5	0	1	0	24
有意差なしの種目		5	4	12	3	2	3	8	4	3	44
下回っている種目		18	14	7	15	16	4	16	19	21	130

◎上回っているもの、○差が認められないもの、▲下回っているもの、—未実施

昨年より、上回っている種目数は倍増（昨年：11種目）し、下回っている種目数も減少したものの（昨年：151種目）、依然として全国平均値に及ばない種目が多くある。

「長座体前屈」については、昨年同様概ね上回っており、柔軟性は安定している。

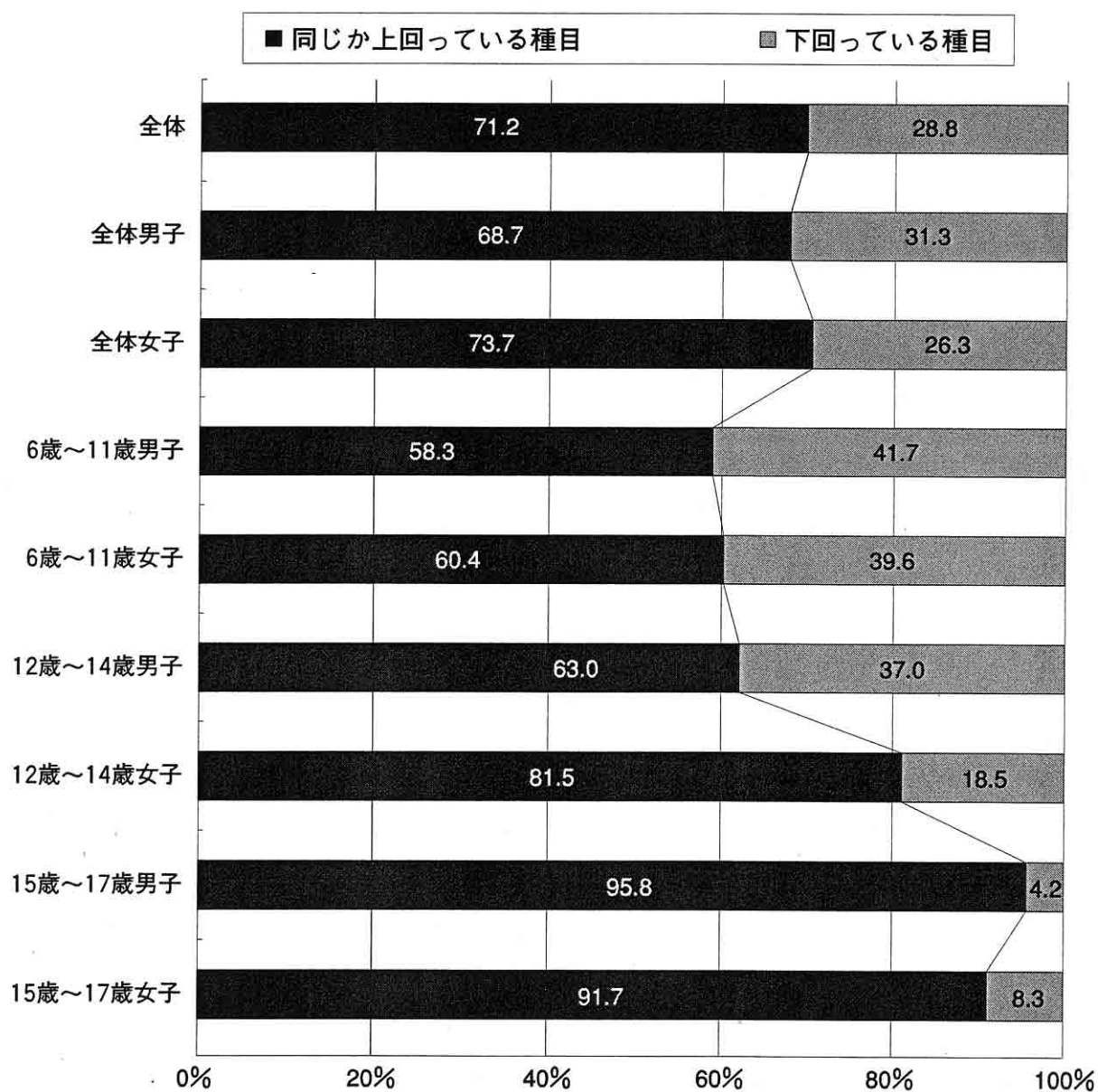
男子は、15歳までの体力低下が著しく、女子は、8～15歳までの体力低下が顕著である。

また、運動の基本とも言える「走・跳・投」は、15～17歳の持久走を除いて、全体的に下回る結果となっている。

(3) 広島県平均値の平成13年度と平成14年度との比較

〔表3〕

次のグラフは、広島県児童生徒の体力・運動能力の調査の結果について、広島県平均値の平成13年度と平成14年度との比較を行い、同じか上回っている種目、下回っている種目を年齢男女別に表したものである。その結果、全種目中で平成13年度の平均値を「同じか上回っている種目」は71.2%、「下回っている種目」は28.8%となっている。



〔表4〕

次の表は、県平均値の比較を種目年齢男女別にまとめたものである。

性別		種目 年齢	握 力	上 体 起 こ し	長 座 体 前 屈	反 復 横 と び	20 m シャトルラン	持 久 走	50 m 走	立 ち 幅 と び	ボ ー ル 投 げ
男 子	6	◎	▲	◎	◎	◎	—	◎	▲	◎	
	7	◎	◎	◎	◎	▲	—	◎	▲	▲	
	8	◎	▲	▲	◎	▲	—	◎	▲	▲	
	9	◎	▲	◎	◎	▲	—	▲	▲	▲	
	10	◎	◎	▲	◎	▲	—	▲	▲	◎	
	11	◎	◎	▲	◎	◎	—	◎	◎	◎	
	12	◎	◎	◎	◎	▲	▲	◎	◎	▲	
	13	◎	◎	◎	◎	▲	◎	◎	◎	▲	
	14	▲	▲	◎	◎	▲	◎	▲	◎	▲	
	15	▲	◎	◎	◎	—	◎	◎	◎	◎	
	16	◎	◎	◎	◎	—	◎	◎	◎	◎	
	17	◎	◎	◎	◎	—	◎	◎	◎	◎	
女 子	6	◎	▲	◎	▲	▲	—	▲	◎	▲	
	7	◎	◎	◎	◎	▲	—	◎	◎	◎	
	8	◎	◎	◎	◎	▲	—	▲	▲	▲	
	9	◎	▲	▲	◎	▲	—	▲	▲	▲	
	10	◎	◎	◎	◎	▲	—	◎	▲	◎	
	11	◎	◎	◎	◎	◎	—	▲	◎	▲	
	12	◎	◎	◎	◎	▲	◎	▲	◎	◎	
	13	◎	◎	◎	◎	▲	◎	◎	◎	◎	
	14	▲	◎	◎	◎	▲	◎	◎	◎	▲	
	15	◎	◎	◎	◎	—	▲	◎	▲	◎	
	16	◎	◎	◎	◎	—	◎	◎	◎	◎	
	17	◎	◎	◎	◎	—	◎	◎	◎	◎	
同じか上回っている種目		21	18	20	23	3	10	18	15	13	141
下回っている種目		3	6	4	1	15	2	6	9	11	57

◎同じか上回っているもの、▲下回っているもの、—未実施

全体的に向上しており、11歳及び15～17歳の男子、7歳、11～13歳及び16～17歳の女子については、記録の伸びが著しい。

しかしながら、8～9歳及び14歳の男子、6歳及び9歳の女子については、体力低下傾向にある。

種目別に見ると、特に、20mシャトルランが課題であり、全国との比較にもあるように、運動の基本とも言える「走・跳・投」の向上が求められる。